

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 21 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370458

研究課題名(和文)現在の中央アジアにおけるリンガフランカとしてのロシア語の特徴と変容の研究

研究課題名(英文)A Study of the Russian Language spoken in Central Asia as a Lingua franca

研究代表者

柳田 賢二 (YANAGIDA, Kenji)

東北大学・東北アジア研究センター・准教授

研究者番号：90241562

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：ウズベキスタンでは欧州系ロシア語話者が減少しているが、彼らの子供たちは依然ロシア語で教える学校へ通い、ロシア語しか話さない。ロシア語単一話者のロシア語は、年が若いほど地元民族の人々が訛りと欧州語にない独特の統語規則で話すロシア語リンガフランカに似てくる。現在の学校ではロシア語単一話者の子供たちもロシア人と話すより現地民族の友達と話すことの方がはるかに多いからである。言語接触は単一言語話者の言語にも影響を与えるが、彼らの母語は、地元民族の人々の話すリンガフランカに似てくるのである。地元言語が旧権力語に影響を与えるのはこの過程を経てであり、両者が音韻的にも文法的にも似てくるのはそれ故である。

研究成果の概要(英文)：Russian-speaking people of European origins are decreasing in number in Uzbekistan because of economic difficulties, but children of such people go to Russian-speaking schools and speak only Russian just as in the Soviet era. We noticed that the younger a Russian monolingual is, the closer his Russian is to the Russian lingua franca which Central Asian bilinguals speak with accent and original syntactic rules that we can never find in European languages. It is easy to explain this fact: Russian monolingual children now chat at school much more with their friends of Central Asian nations than with Russians. Thus, we can conclude that language contacts affect even the language of monolinguals and their mother tongue assimilates to the lingua franca spoken by local peoples. Elements of the local languages affect the former "dominant" language through this process, which makes them similar both phonetically and grammatically.

研究分野：ロシア語学

キーワード：ロシア語 言語接触 中央アジア ウズベキスタン

1. 研究開始当初の背景

(1) 1980年代頃より言語学の世界ではそれまで言語学の「周辺領域」としか位置付けしかされていなかった「社会言語学」という分野が隆盛を見るに至り、とりわけ、「言語接触」という現象により発生するピジン言語や、それを母語とする人々が出現した場合にそうした人々話すクレオール言語の研究が盛んとなった。

(2) こうした研究は当初、主に大航海時代以降に発生した西欧諸語と植民地の言語が接触したことにより発生した「西欧語基盤ピジン・クレオール言語」をその主たる対象としていた。異民族による征服に由来する言語接触と、また、征服者でなくても政治的、経済的または文化的に優勢な民族の言語と劣勢な民族の言語との言語接触とのいずれもが当然の現象のごとく繰り返され、重大な言語変化の原因となってきたことは、ローマ帝国の膨張による俗ラテン語の拡散とロマンス諸語の形成や、また漢語がシンタクス規則を伴ったまま日本語や朝鮮語に大量に流入し、現在に至るもなお強い造語力を保っていることといった例を示すまでもなく歴史上明らかである。

(3) 本研究課題の研究計画調書作成時である平成 22 (2012) 年はソ連崩壊から 21 年が経過した時点であった。これは中央アジア各国の諸民族にとっては学校教育によるロシア語のバイリンガル化が極盛期を過ぎ、また、ウズベキスタンのように経済不振が続く国では学校でのロシア語教育の貧弱化に加え、ロシア人をはじめとするロシア語単一言語話者の出国によるロシア語の衰微が顕著になった結果、タシケントのような多民族の大都市においては「同じ都市に住む同国人でありながら共通語がなく、言葉が通じない」という現象が以前よりはるかに顕著に見られるようになっていた。

(4) ウズベキスタンのような典型的な多民族国家において相対的な最大民族であるウズベク人の言語であるウズベク語の使用を全民族に強制することは他の諸民族の反感を買うという問題がある。ソ連崩壊後、同国政府も一旦はこうした政策を採ろうとしたがやはり失敗したため、2012 年時点においてはロシア語の顕著な衰微にもかかわらずその 10 年前に比べて町中にロシア語の看板がかえって増えるという矛盾した状況にあった。また、辛うじてロシア語という 1 言語のみがリングヴァフランカ (民族間共用語) として用いられている多言語社会であるがゆえに、ロシア人やウクライナ人をはじめとする「ヨーロッパ系」諸民族の人々はロシア語単一言語話者であり現地の民族語を全く話せずとも特段の困難に直面せずに現地で働き、生活することが可能であった。

2. 研究の目的

(1) 本研究課題は、上の(4)で述べたような「ヨーロッパ系」諸民族であるロシア語単一人々の話す口語ロシア語を録音しつつ観察してその特徴を見出すとともに、これを経時的に続けることにより現に進行しているその変化を観察し、同地のロシア語の変化の方向を考えることに目的を定めた。

(2) 研究代表者柳田は2001, 2002の両年および2005年以降の毎年ウズベキスタンを訪れ、また、キルギスとカザフスタンへもそれぞれ数回の渡航歴がある。この3国を継続的に訪問するうち、中央アジア諸民族においてはロシア語が民族語との頻繁なコードスイッチングの文脈で用いられるのが常態であるのみならず、話者の母語がいずれの言語であるかに関わらず、特にシンタクス面において標準ロシア語の規範に反し、モスクワやペテルブルグでは到底許容されないような現象が当然の如く現れる「中央アジアロシア語」といべき言語が用いられていることを知った。

(3) 本研究の開始時である平成 23(2013)年においては特にウズベキスタン・キルギス両国は経済不振が甚だしく、それでもロシアやウクライナへと去らない「ヨーロッパ系」の人々とは、ロシアやウクライナに全く係累がないため行く先がないか、あるいは、何らかの理由によりロシアで暮らすことを欲しない人々にほぼ限られていた。また、ロシア人であって係累を頼ってロシアへ一旦は移ったものの、寒冷な気候やロシアのロシア人のあまりに無遠慮でぎすぎすした態度に馴染めず故郷である中央アジアに戻って来ってしまう者も存在する。

これらの人々のほとんどに共通して言えることとして、祖父母が4人ともロシア人であることや、あるいは4人ともウクライナ人であるなどということは極めて稀であるということが挙げられる。祖父母の代まで遡るとロシア人とウクライナ人のほかソ連内のスラヴ系民族であるベラルーシ人はもとよりポーランド人やチェコ人、さらにはドイツ人やギリシャ人など非スラヴ系の民族が含まれることさえあるが、現在では民族籍にかかわらずロシア語のみを話す。本研究の進行と時を同じくして露・ウクライナ関係が極度に悪化したのが、両国の関係がいかに悪化しようとなら相互の間に民族的憎悪が発生していることを示すような言動は一切見られなかった。このことには、祖父母はもとより父母でさえ民族籍が異なるのがごく当たり前であるという事情も影響していると考えられる。

特にソ連時代を知らない現在の若い世代にとってはロシアもウクライナも「いずれ帰るべき自分の国」ではなく、もしロシアへ移住することがあったとしてもそれはよりま

しな経済生活を送るためか、あるいはより高度な教育を受けるため国外移住するという事に過ぎない。

(4) 中央アジア各国では、現在でもこのような中央アジアの「ヨーロッパ系」ロシア語単一言語話者はほぼ例外なくロシア語で教える学校へ通い、大学を選ぶにあたってはロシア語で教えるコースを選ぶが、ウズベキスタンにおいてはカザフスタンと比べてもこれらロシア語を話す「ヨーロッパ系」諸民族の人口比率が非常に低くなっているため、小学校においてさえ彼らのクラスメートの多くはヨーロッパ系民族ではなく、子供にロシア語を身に付けさせ、将来は（場合によってはロシアの大学に進ませることも視野に入れつつ）ロシア語で高度な教育を受けさせようとする現地民族人々の子供たちである。

このことはつまり、中央アジアにおいては、たとえある子供自身が言語獲得期の初期から一貫してロシア語単一言語話者であったとしてもそのクラスメートの多くはロシア語単一言語話者ではなく、家庭ではウズベク語、タジク語、カザフ語などとロシア語を併用するバイリンガルであるということにほかならず、近年のウズベキスタンにおいてはこのことが特に顕著になっているのである。

(5) 研究代表者柳田は、本研究課題の第1年目である2013（平成25）年に学校教諭へのインタビューを通じて下述のことに気付いた。

それはつまり、現在のウズベキスタンにおいては、確かに一方では「ヨーロッパ系」住民の出国と現地諸民族へのロシア語教育の貧弱化とによりロシア語を話す人々が減って急速にロシア語が通じにくくなっているという現実が存在することは認めざるを得ないが、しかし他方ではまた、この状況とは、現地諸民族の人々が話す（ロシアのロシア人から見て）著しく「非規範的」な、あるいは「崩れた」ロシア語が、今なお同国に住み続けているロシア語単一言語話者の子女たちのロシア語に対して強い影響を及ぼす可能性が急激に高まるという、言語接触に起因する言語変化を考えるにあたって極めて重要な局面でもあるということである。

なぜなら、日本国内で少年期に異なる方言を話す地方に転居してそこの学校に転入した子供の例を見ればすぐに分かる通り、言語形成期の子供の言語に最も強い影響を与えるのは家庭内で聞く両親の言葉ではなくて同年配の遊び友達の言葉であることが明らかであるからである。ロシア語単一言語話者の子女であり、ロシア語で教える学校へ通ったとしても、そうした子供たちの遊び相手の多くが現地民族のバイリンガルである限り、ロシア語単一言語話者の子女のロシア語が現地民族の子供たちの話すロシア語に強く影響されたとしても何の不思議もなく、十分

にあり得ることである。

そしてこのことは、単一言語話者自身の話す言語自体が、ピジン化やクレオール化を経ずとも複数世代を経れば言語接触という原因により周辺諸言語と似てくるということがあり得るということを示す事実なのである。

(6) 第1年目である2013（平成25）の9月に行った第1回現地調査においてこの「単一言語話者の言語がピジン・クレオール化を経ずとも言語接触により周辺諸民族の言語に似てくる」という重要な言語変化が中央アジアのロシア語において起こっていることを観察することができる可能性が現に存在することに気付いたので、本科研費課題による現地研究の中心は、上述の現象が実際に起こりつつあるかを検証することに置くことにした。

現在のウズベキスタンではロシアの衛星放送を見ることができ、ロシアのロシア語雑誌を買うこともできる。それゆえ、同国のロシア人ほかの「ヨーロッパ系」諸民族の人々とは、情報面においても言語面においてもソ連時代の中央アジア朝鮮人のように民族の故地から完全に「隔絶された」人々であるとまでは言えない。また、同国のロシア人のほとんどが今なおロシア語単一言語話者である。しかし、たとえ同国に残ったロシア人たちのコミュニケーションが今後ともロシア語でなされたとしても、その話し相手は多くの場合現地民族の人々であらざるを得ない。このような状況で中央アジアロシア人に文化変容が起こったとしても、また単一使用言語であるロシア語に言語変化が起こったとしても何ら不思議はない。これはもはや「ディアスポラ化」であると言うことができる。

本研究課題による現地研究で主たる研究対象としたのは、このようにディアスポラ化しつつある中央アジアのロシア語単一言語話者の言語としての「中央アジアロシア語」である。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究課題では主要な目的を上述のような「非ロシア語母語話者である中央アジア現地諸民族の話すロシア語へのロシア語単一言語話者の口語ロシア語の同化」という言語変化が実際に起きているか否かの確認に置いたので、現地調査の中心は現地のロシア語単一言語話者の自然な話し言葉を記録することに置いた。そのため、現地人コーディネーターを通じて確保したインフォーマントへのインタビューという方法を採用することになった。また、インフォーマントの中心は言語形成期を終えて間もない、現在まだロシア語で教える普通高校（リツェイ）や専門高校（コレッジ）に在学している若者たちとすることとした。

(2) 但し、もしウズベキスタンのこの世代のロシア語に存在し、現在のモスクワのロシア語に存在しない特徴があったとしても直ちにそれが最近の言語接触に起因する言語変化によるものとは言えない。なぜならば、言語変化は単一言語社会であったソ連時代のモスクワにおいても継続的に起こっていたということは周知の事実であり、またロシア語がウズベキスタンで話され始めたのは帝政時代なのであって、もし仮に言語接触という要因がなかったとしても、ロシア語系住民の多かったソ連時代のうちにロシア語のタシケント方言やサマルカンド方言というものが形成されるのは当然のことであったと考えなければならないからである。

(3) このため、高校生層より 10 歳以上年長の 20~30 歳代、さらにソ連時代を記憶している 40 歳代、また、現在インタビューすることが可能な人々のうち最高齢の 70 歳代の老人層へのインタビューも行った。

#### 4. 研究成果

(1) 中央アジアの現地諸民族のロシア語を聞いていて最も目立つのは、「時の従属接続詞 когда (英語 when に相当) が従属節の最初ではなく 2 語目に来る」というシンタクスにかかわる非規範ロシア語的現象であり、これはウズベク人、タジク人、キルギス人、朝鮮人、ドゥンガン人など母語が系統的にも構造的にも全く違う中央アジア諸民族のロシア語に共通して見られる特徴である。2013 年、2014 年の訪問時にはこの特徴を含む例文を作り、書き言葉の影響を徹底して排除するため、口頭で文脈を示しながら口頭のみで若年層から中年層までのロシア語単一言語話者たちに聞かせたところ、そうした文に対して「本国人」がするような拒否反応を示すことがないのみならず、特に若年層のインフォーマントにおいては「私もそう言うし、そのシチュエーションならばそちらの方が適切だ」と答えるという反応さえ見られた。他方、日本人である柳田の感覚で上記シンタクス上の非規範ロシア語的特徴から類推してあり得そうに見える文を作って聞かせたところ、時の従属接続詞の前に置かれるのが主格だけでなく対格であっても名詞類であれば許容されるが、それと同じ位置に「ここへ」の意味を表す副詞を置いた場合にはロシア人と現地協力者であるウズベク人バイリンガルの双方が強い拒否反応を示すという事実が観察できた。ここでその具体例を示すことは避けるが、このことはロシアのロシア語には全く存在しないシンタクス規則が中央アジアロシア語に発生しつつあることを示す重要な事実である。今後においてこうしたシンタクス規則に関する精緻な研究が必要であることを強く感じたが、このことにより、現地諸民族の話す非規範的ロシア語が中央アジアのロシア語単一言語話者のロシア語

に強い影響を与えており、同地のロシア語が言語接触により変化しつつあるということを確認することができたので、2014 年冬以降の現地調査はあらゆる言語研究において絶対必要不可欠な基盤となる音韻論の分野に的を絞ることにした。

(2) また、2013 年秋のサマルカンドにおける調査では、ロシア語 Да, Хорошо, Ладно (英語の Yes ないし Good に相当) の意味を持ちサマルカンド・ブハラ両州のウズベク語とタジク語にまたがる広域方言語彙である Хай 「ハイ」が、ロシアでは通じないことを指摘されなければ気付かないほどサマルカンドのロシア語方言に深く入り込んでいるという事実を知り、2014 年秋の同市調査では別のインフォーマント 4 名からこの語を使用している事実を確認することができた。

(3) 2014 年冬、2015 年秋、同年冬の現地調査では高校生ほかの若年層のほか、それと対照するため 70 歳代のインフォーマントを主たる対象として主に中央アジアロシア語の音韻面にかかわるインタビューを行った。2014 年 9 月には同国のサマルカンドにおいて 20 歳代の学校教師 3 名のほか専門高校の学生 1 名という計 4 名の同市在住ロシア語話者へのインタビューを行い、対露感情やロシアへの移住の意向の有無のほか、同地のロシア人自身が自覚している方言的特徴やこれまでにロシアのロシア人から「訛り」として指摘された音韻論レベルでの特徴等について尋ねた。その結果、同地では標準ロシア語で無声そり舌摩擦音 [s] としての実現しか許容されず口蓋化のあり得ない /s/ を半口蓋化した無声前部硬口蓋摩擦音の [ʃ] として実現することが常態となっており、一般人とは違い標準語の規範に合った発音をすべく自らのロシア語の発音に対し日常的に注意を払っている学校の英語教師ですらその非規範性に気付かないという段階に至っていることを確認することができた。

また 12 月にも同国での現地調査を行い、首都タシケントにおいて 3 名の現地生まれロシア語単一言語話者のインフォーマントに会い、主に音韻面に関する聞き取り調査を行った。その結果、特に若年層においては上出のそり舌摩擦音音素 /s/ が半口蓋化前部硬口蓋摩擦音 [ʃ] として実現されるのが常態となっているため口蓋化前部硬口蓋摩擦音音素 /s/ との区別が曖昧となり、柳田がそり舌摩擦音音素 /s/ を含む語を含む短い例文を意図的に完全に口蓋化した前部硬口蓋摩擦音 [ʃ] を用いて発音してもそれが誤りだと思えないという事実を確認することができた。また、こうした現象がウズベク語との言語接触に由来する可能性を示唆するいくつかの現象も観察できた。

上出の無声そり舌摩擦音音素 /s/ を含む語を含む短い例文を完全に口蓋化した無声前

部硬口蓋摩擦音 [ʃ] を用いて発音してもそれが誤りだと考えないという事実は、標準ロシア語でロシア字の «ш», «щ» にそれぞれ対応し、語頭および母音間で [ʃ], 対 [ʃʃ] として実現される硬子音音素 /ʃ/ 対軟子音音素 /ʃʲ/ の対立が曖昧化ないし無くなりつつあることを示す重要な現象である。現に、12月にタシケントでインタビューをした専門高校生のインフォーマントは自然会話においても書かれた例文の読みにおいても «Прошу прощения» 「ちょっと失礼します」という慣用句における «ш» を、それが母音間にあるにもかかわらず、一貫して短い口蓋化した無声前部硬口蓋摩擦音 [ʃ] として発音しており、他方、同人は、無声そり舌摩擦音 [ʃ] で発音されるべき母音間の «ш» を完全に口蓋化した [ʃʲ] で発音した例文の読みに対しても「正しい」と評価した。これは、このインフォーマントにとってロシア語の音素 /ʃ/ と /ʃʲ/ の区別がなくなりつつあることを示す重要な事実である。1980年に同市で生まれたインフォーマントがこの «Прошу прощения» の «ш» を一貫して長い [ʃʲ] で発音していたことと考えると、これはごく最近になって顕著になったタシケントのロシア語の変化だと考えるべきであろう。

(4) さらに特筆すべきこととして、この専門高校生は Япония (「日本」という語の語頭にあるアクセントのない я を一貫して完全な [ja] で発音していたことが挙げられる。これは яканье と呼ばれ、規範的ロシア語では「不快な訛り」として許容されない発音だが、そう発音する理由を尋ねたところ、「小中学校の時から周囲の友達全員が常に [ja] пония」と言っているのだから、そう言う他はありえない」との答えが得られた。この専門高校生はロシア語で教える小中学校で学んだとはいえそのクラスメートにヨーロッパ系民族の生徒が少なかったようであり、これは極端な例であるが、この言葉は現地民族バイリンガルのロシア語がロシア語単一言語話者のロシア語に影響を与えていることを端的に示す証言であるということが出来る。

(5) また、2015年の9月と12月にはタシケント・サマルカンド両市の若年層のロシア語単一言語話者を対象に彼らのロシア語の音韻面に関する面接調査を行ったが、今回は高校生に加え、言語形成期を終えた直後である中学2年生にまでインフォーマントの範囲を拡げた。その結果、両市とも中高生層のインフォーマント全員において無声そり舌摩擦音音素 /ʃ/ が半口蓋化子音となっており、調査者が敢えて /ʃ/ を含む語を含む短い例文を完全な口蓋化音 [ʃʲ] として発音して聞かせてもその部分が誤りだとは考えないなど、/ʃ/ との区別が曖昧化しつつあることが確認できた。さらに50年以上タシケントに住む70歳代の高齢者のインフォーマントの発音と対

照した結果、若年層では /ʃ/ の実現として現れる子音のそり舌音性が確かに低下していることが確認された。

(6) ロシアでも、例えば шагi (「歩み(複数)」) のような語が20世紀前半の規範ロシア語にあった [sigʲi] ではなく [ʃlɔʲi] と発音されるようになり、「アクセント直前音節での /ʃ/、/z/ の後の /a/ の特殊な弱化の消失」という現象が起きているが、ロシアではこの現象は /ʃ/ のそり舌音性 (つまり非口蓋化音性) によって説明され得る。他方、外見上これと同じ「アクセント直前音節での /ʃ/ の後の /a/ の特殊な弱化の消失」という現象がウズベキスタンにおいても起きているのだが、2015年度の調査により、同国ではこの現象が「/ʃ/ の脱そり舌音化と半口蓋化」というロシアにおける説明と完全に相矛盾する現象と並行して進行していることが分かった。

(7) ウズベキスタンでのこの現象は、ロシアにおいてもしばしば見られる spelling pronunciation の影響という要因のほか、ウズベク語やタジク語がそり舌音の [ʃ] を持たないためこうした現地民族の人々のロシア語で /ʃ/ が一貫して英語の [ʃ] に近い半口蓋化音として発音されているという事実に加え、これら現地民族の人々のロシア語において上述のように Япония を [ja] пония と発音することが当然と思われるほど яканье の非規範性に対する認識がなくなっており、そのことがロシア語単一言語話者のロシア語に影響したと考えることができる可能性がある。

(8) またさらに、2014-2015年の調査において、タシケント・サマルカンド両市の高齢層から若年層にわたるインフォーマントのほぼ全員において語中の -зж- が現在のモスクワで聞かれる長いそり舌音の [zʒ] としてではなく、[ʒʒ] という20世紀前半の規範ロシア語にあったのと同じ古い特殊な子音で発音され続けているという事実が確認された。

(9) これらの現象は、そり舌子音を音レパートリーに持たないウズベク語やタジク語を母語とするバイリンガル話者のロシア語がロシア語単一言語話者の音韻面に影響し、一方では音変化、他方では古い音の保存として現れたものと解釈することができる。このような現象が可能であることを発見したことが本科研費課題の最大の成果である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

① 柳田賢二、「ウズベキスタンにおけるロシア人のディアスポラ化とそのロシア語の特徴について」、日本ロシア文学会東北支部

2014年度研究発表会，2014年7月5日，山形大学（山形県・山形市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柳田 賢二 (YANAGIDA, Kenji)

東北大学・東北アジア研究センター・

准教授

研究者番号：90241562